古今文鈔

四之五

911.3
ホ
4-5

女房奉書類

土口天滿宮文　花起請　報恩表

教命類

双林寺修二石碑ノ教　落柿舍制札

書狀類

答二蒲生右衛書狀之　返狀　備盛移又

贈二充栗充人書二落書　申ノ刻二狀

西保の事のつゝも月比こゝはの園中清のつゝら天保言
のたゝつゝれかつゝなりかゝてれすもゝつゝ
つゝくむいつゝ年のみんくゝおとかつてもゝ祝をゝる
やゝふゝゝとゝゝゝのちつゝれをもゝれて又ゝゝ
ゝゝゝ

報恩表

報恩の巻二ていあんうオよかりて七年の春と
て未曾有なれ十在のもとに
在々の勢とたりて二日おのれもとに
負うてたの志をうけんとて伊勢の
あちせうあれて
のまちかたに
ようおのれとちかう
そそく報恩の巻
そかくとも
まをあまり功名に

やうく一行の恩とうけて孫よ行の報あらん
百よの恩あく行ろう百よの報あんやく頼く假名
の俚と寄りて生ふのちうそうそ
此文字の百よれとうれて一万よ一派の報恩ふたんる
計ことにこんちうたをたれをその在のひりと
ちとうんやうそを表文のおりのようてて
うれ報そうてよ

狂云此表ハ我師ノ丹膳ヨリ出テ一字半言モ筆端ノ
戯噱ニナオス我師ノ靈魂ハ解了スレ然ニハ之恩ニ

のれ供佛の料とおぼしくそも〳〵濃縣のものそもそも
とおぼしくれ而給ふにはあらじかもしおのそも像と
碑文の秘法をもつれはて信心不退の志をたゝ
年〳〵碑面のつゝもとあるを見〳〵ふ月〳〵に供佛の燈を
如何れ〳〵ふことの憲をかれく後あんと而延元未
二月上院之利事園城寺の僧王の令にかゝりて渡部
をめぐりひ教化をほどこしてふくけばゝ施りとりもも
往云紀教八傳をなかゝ文法二效ヒテ實二教王ノ令年
ヲ促セリ去レハ紀書ノ教ヘルおハ年々三月十二日ヲ以テ
事山三墨宜ノ實式アランヤヲ永ク後来ノ仍ハニ

催促セリ誠ニ紀諾ノ名アラン人ハ誰カ合信ノ志ヲ存セ(カラン)
独心ニ祥園ノ基ヲ金ト石碑造立ノ時ノ地次ニ供
佛ノ料ト八紀時ノ季華料ヨリ以ゝ三年月ヲ
ヲ重ネテ信心ノ志ヲ遂ト碑詰ノ一花五葉ヲ借ツテ万一ノ二ヲ
ヲ錯綜セル花葉靈ハニ奇絶ノ意心對ト云ヒ但シ出仏ハ故云ノ持仏
ヒヤ紀師ニ附屬アリシヲ再ヒ紀寺ニ奉納セリ或ハ石碑
ノ謎文ナト一軸ノ秘注ヲ以陣ニ殘セル事由ハ碑文類ノ下ニ
但シ紀園ハ山莊ノ名ヲ差シテ當時ニ諱ノ恐レアレハナリ

落掃舍制札

一 行李之所經過及
　 所在頓舍
一 祇應薪芻
　 大駕行幸
一 幷令守衛
　 魚鳥
一 速及一次吹
　 者
　 如諸奉行
　 向玉東

一 陳設如在朝之儀
　 大喪則令守衛
　 如常

右條

凡行幸所至頓舍一宿之
牲八殊二篤疾ニシテ者
ヲ云フクシテ後ノ條ニ
二五七事ノ内人来リテ
云フトヲ左モ公表ノ制
アリテ鎮西ニ准諸奉行
ト故云羽モ称ヒ給ヘル
モ

奉行ノ二ヨリ用立或ハ紛所ノ名目ニモ未ダ煙筒ノ
掃地ノ右又ハ煙ヒノ人ト共ニ一タリ或ハ洗ノ居賜
ト八屋數字ノ暗ニ平ヤ方ヨリ朝メノ賜ヒヤト仰セ
玄来ハ向井年シテ洛陽ニ在ノ浪人ト
書狀類
答二蒲冠者一狀　源賴朝
十一月十日ノ仰ニ云ク来ル廿二日ニ延引ノ事カ
云ヘリテ後ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ事ノ子細ヲ申ス人ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ

一一拜ス一一國ノ名ヲ一一ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
當ノ一一國ノ名ヲ一一ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ
ヨリ仰セ下サルヘキ事カ如何ヲ

ノ甲冑ヲ着シテ弓矢ヲ帯ビ天皇ヲ宮ヨリ内裏ニ奉
天下ヲ鎮メ国家ヲ保タシメ給ヒシ事ヲ教訓シテ人ニ悟ニ給ヒシ事ヲ
義経ノ利発ヲ誡メ玉ヒ五百年前ノ人情ヲモ看破
スベシ然ルニ宮中盛ノ憶ヒ悔ヲ数キテ是ヲ生捕ニスベシ
惟幸ニ千里ノ勝負ヲ知リテ誠ニ賢仁大度ノ人ト云シ

法文

蓮如上人

書ものこと
てねんごろ
の死朝もを

ねんごろ
ありて
ことに
ありて
ありて
ありて

身ノ丈某ハ尺ニ成ケリト武士ノ本意ノ尺ハ七尺ト定タル人ナト
ハ稀ニハ伎倆ト云イ越京ニ痩我ト云フ風雅ノ上ヒラ
知ラサル二ハ如何ン誠ニ此文ノ有難キ所ハ此ノ詞ヲ文能
トヘルヘシ

返忙

くきをてをもろ以ゑ
[illegible]

[illegible]
行云北性ハ城南ノ第伍ヲ在リ手書紙ノ筆勢文法
ノ幸ある人ハ皇カニヲモ指ツヘキヲ何某ノ金紙
金泥ヨリモ定ニ騎縫ノ文ラ添ヘタル誠ニ流ノ祖タラン云
ムモ計ラ八書ニ物ナルラ風雅ハ狂ヲノ虚言ヲラ知リヨ

猫伝状ノ通

消息ノ移文

恐れのう白に福ともなる
あくてうれおなる

の奥ゝゝもてけ以の酒の勝負を決せむとそゝ以刻
北十九ゝゝゝゝゝの村ゝ文陣、耳元以
ゝゝゝゝ村坊ゝ用鏡とかをゝゝゝゝゝ

証拠ノ為ニ別ニ文ヲ載セラレタリ
三福寺ハ作ト云ヘルハ當国ノ高田ニ名ヲ知レル家狭ハ田牛
ナリトヤ然ルニ此作名ヲ依用ノ入道ト云ヘルハ例ニ我師
ノ任名ナヤラン某(ソコ)ノ陳国ナルハナラン但シ我師ハ播ノ産流
(十一)

贈(ル)二尼栗本老人(ニ)書

手紙

そもそも我師ともうしまいらせ候ハ我ノ如キ者ニ対シ
ては西本の三ツの事ニ付ても隆夜あり汝ノ
過角を作ル風の猫よりもみのまに隆夜あり汝ノ
ここよの風雅ともをもうす世にまれなる人にて候うまま
ありて候うまま

ぬれこもりてれいやーとう洞あり紙こに尼栗の
ことをそれの経記いとおもしろきことまゝありて雪を西方の便
あるまゝありてあるひは
わるるをもうるとも紙なよの
紙諾する及ばざるとも要化
うしろを人のこうもあ
るれとも尼をし要化の花とおかしうん人々
その要をもろれさも尼化のこ
人そそれて雑(ムラ)雑の中にあるひ感ずて酒をの尼栗
あらばそそれのあるとをもうすの報

詔書

一 今の同れ事 うくんそくそくこれ社のまつけなも
詔らの人てそいわらうんをもんとそもたまのそれの
今名に 政ひてう二
おそくもそうそうこの
とてあそくとそうて後るに所まんをもれい奇
かの所月そ人まうこ河の国の今文初て行れる一言
もそくとつまき今やもとひもろと後てはそもう
日後直らりそ人軍

信もり十山今とも一行るの原そ行るの
まつ一とこれまれ修五れ行後列て今う
来のそく勝もそ也修これ同れそ修五
不名又刺今ひもれ修これそ後五
ものおやの不塔のくそれそ勝ひそ
ひそそうそうそ行れんそ河かつの
おうそおも行ふれの山行ふんとそそ
そてその正そそ弟とひやうも行
やふうそ連今師の本山社来のそ
ふ行うそ非そ

能因ハ風情ヲ讀ミ賴政ハ風姿ヲ詠シテ殆ト誠ニ
能因ハ出ル子ヲ以テ亭ニ遠近ノ情ヲ知リ賴政ハ見ル事ヲ以テ
亭ニ青白ノ姿ヲ見ル本ヨリ詩ニ連俳ハ姿情ノ二ヲ辨ヘ殊
ニ風姿ノ先ヲ知ル但シ伊予ノ入道モ甚タ秘抄ヲモ知
ヒヲ和歌ノ奥義ヲ傳ヘ名ヤ石筆數ノ論ハ茲ニ明ラ

蓮二房

仮七仮ニ仮名仮状

おくれゐて恋ふる涙の数よりも
先立つ袖の露ぞ繁きと

[illegible]
[illegible]
[illegible]

本朝文鑑目次五
論類
博学ノ論　博知ノ論
解類
念仏ノ解　九品ノ解　養生主ノ解　墨翁ノ解
傳類
正直ノ傳　藤六坊ノ傳　白狂ノ傳
記類
枕ノ記　白鴎堂ノ記　獅子庵ノ記　往来松ノ記
六花亭ノ記

博奕論

我おふにそよ投ぞの二あり博くそまへ花所以
とそ汚れいそと論語よ引とくいふあり
言にあるへ人を如の五に孔子の筆に籍
より和漢の諺そよくそへて儒卿を花の筆に籍
あく待の望にまそへ人のんを待つて五つの書を
のことを学んで一つも古人のんを待つて五つの書を
あそうあ汚るそんなの所以をそうあくへ
を預て書を伝支よ汚るやいけ汚ない何故と

加へ論をへ預ものよ何事とそうあをむうよ
作者の情を汲されのそへ汚れりふ五車新瑞を字
言にあるへ人を如の事と皆そうて儒書を捨て和論語と
駅き仰預に暫く辻説をゆて釈迦の拈華に伝放
よ汚らへ笑ひ汚るれよの事接を何支よかへ歌を詰
て花花の寓言に如の祝宮あれよと三重の勝と看破
されにその釈迦の預そんよ汚ふなめれよの書あんよ汚ふ
よ言とそうあをむうよ後に汚れ
前の賢人を儒書仰預よ伝
とそ汚んに後の賢人を儒書の

たゝれをあをそうんい指れの伝ひ
そうも伝ひ特そのの人ら
なのなる伝の書よ
おそうたとし後のあるの人よ
取ちゃれを蘭陀
の文庫よそうふるし
行方の蝟(こび)をこちゃ
そうれら人間をよ
行方文章いふまの
い今世の指のまま

[illegal] 生れて宗よ用ゆれら人間の論義をたゝ野ら
何ゝも猿ふる一伝れ学者の仏論そうて
論学よ也一伝あるくよ雖よなの所以を
伝れを言よ一伝ゆる門人ら伝ら達よ也の
人らそうてゝもれ一行そかく仏陀よあるよ
そうる人よらゝやをて行とそうるいら猿ふる人

博知論

西谷坊

行取ふにそよ表素の二ありまま言語もれるよ
和ふ陳くら人の腸をそうる伝んいれの事ら

武陵の芭蕉庵ありて杜律とうたひ
鶏鵡粒と風凰枝の平仄もたゞしからんと
かくいひわたるをこゝろに註とうたに詛倒
(キヤウフ)
競(ケイ)奇(キ)とうたれどいとそれの幸に奇怪とのみして
うたを倒語の所以あらんとは知らず人々
あるにまかせ錯綜顛倒の法として上と下へ
そうえ人の句法とのみ云へて転倒の所以をあら
人々もまた所詮の減格ならん古人一字それ
それ秋野の白露を倒おきもりたらや和漢よりけん
あれとも知おとはしらず一字人々まあるにあるる家の秘お

うたと云て元も白露と秋の地と上下へまわして
古人のうたとのごとくひねて倒語の所以とあらん
あらず和漢の通情とうたに杜陵の格法と
うて怪と錯綜の所以とうたへ康の句のうた
とうて却を倒おの所以とうたへ一字と情そ
金銀とうて錯綜倒語のおもしろきとおもし博知の
倒のう油とうて死法多の所以とうたへ
ひれへ古人の情とうたへ古人
のうたのうへ地のうたへ西行法師
のうたの腰を以てひくひ五ふとも

来人のまゐるをとゞめて八百万のことなくてこゝろやすからんをも
なげの二字をもて漫々として皎潔なるにてこゝろ
あり一旦にて西りの駿河あるい天下の富士の高きを望
て五つなの大海いとゞ望むべきにはよろひくさい様様
るをさへんにおれと西りの言のはもいさゝかものこゝろ
の様様あるをおの様おとをもむべ一諾よ西りの言あり
駿るに富士と駿河のあるこゝろ好と人もおもちゆん
と思ふにあひくと味とを活をまれて鬼魅さるゝ煙
かをこゝろひをとの秘みをまゐ活をまひめん法人の新古今

判をとゞろくこゝろの西りの新古今れ判をとゞろくる
いに仏ト上よりおよび論さゞるて之人とれたみの中い
仰ありとゞるれよりにまゐるのをべ一言ふんをまゐ
儒仏をおとり許を連俳をまゐんをまゐて今れ掲ふ
う勝とをとりて今れ掲ふの雲ら服とひくゝ二百年の長
とゞまゐんとりに二なの雲に針おとの完あるて
ご皇五帝七神七佛をとゞまゐ五神七佛をとゞまゐ
にくて儒仏の家のんれ掲をとゞまゐ行をれ人の新古今
をとゞまゐ一一をれのひ論の同のおゝ古人とゞまゐ
特くそのおと特くをれのひ論の同のおゝ古人とゞまゐ
特くそのおと特くをれのひ論の同のおゝ古人とゞまゐ

いそよの高ひくく芳ふ
狂云此二論ハ本コリ一ノ篇ノ趣意ナルヲ張ヨ
ノ銘ニ效イテ東西二筆ノ號ヲ出セリ其前論ニハ
唐天竺ノ博学ヨヲ拳ケテ拓華筆ヲ知
ラハ儒仏ノ言語ハ何ヲ瞎カラント但シ蘭陀ヨリ仁
龍宮城ト云ルハ博学ヨヲ嘲ケル狂語ナカラ和州ノ希有
ヲモ取合ハセタリ然ニ其人ヲハ仏猿ト云イ其我ヲハ
岩猿ト云ルハ例ニ倣ヒ諧ノ筆格ヨリ虚實ノ所ヲ見ル
ヘキナリ後論ハ和漢ノ風流ヲ合ヒテ古人ノ心腸ヲ知リ
タルト古人ノ言語ヲ学ヒタルトノ殆ド同ク

去レハ杜律ニ秋興ノ詩ハ鸚鵡啄餘粟稲粒凡稼穡
碧梧枝ト其語ヲ直ニ云ヲ時ハ枝ノ字ハ支船ノ韵ナレハ
働ヲ先望忍スレ前ニ粟稲ノ粒ト云ハ決シテ格
ヲ犯ス事ト云ヘシ次ニ朝庶ノ仏露モ秋ノ野ニ風吹ク
白露ハト上ヲ下ニ置ク時ハ仏露ハ純ニ粒ナラン
然ニヲ上下ニ轉倒シテ凡ノ吹ク秋ノ野ハト仏露ヲ
上ニ持ハセタレハ其ハ野ハ露ノ置乱ヲ秋モ庶ヒ
ヤウナラン然レハ死活多ノ仏字ヲ以テ画尽ノ詩ヲ
淫ニ出セル筆力ノ神ニハ驚ク外ナシ況ヤ西行ト杏人ノ論
撰集モ同ク判者モ同キニ両人ノ喜怒各別ナ

実ニ仏ノ本情ニ違ハス拓テ意ヲモ十
載ノ今ニ見透サルヽヤニ論ハ總テ所以ノ
テ儒仏兩通ノ至論ナルニ南ノ一字ニ文章ヲ盡シテ究ル
人ノ理屈ヲおトキタル處實ノ金鑑トハ言ノ右ノ
解類　念仏ノ解　法眞上人

世ノ一念十念ヲ往生ヲ
トハ信ノ外ヲさすくるあり念ニ於さるとハ
ヲ一念十念ヲ不定ヲ
あり信ヲ一念ニ生ヲ

一念ヲ不定ヲ
ヲあるあり
あてさき
往云此文ハ一言芳談ニモ在リテ此ト
玉ヒハ此段ハ決定ノ
念仏ヲ玉ヒ玉ハ
ノ事實ニテ十念一

九品ノ解　并序

趣ニ至ル津ノ過角

是仰云

教ゆのなのこあるうこ二父の遠忌を修もる
に供仰施僧の善根と修う行供設のまに
あるを中まに他浩宇おつの人を九品の位よりまの迎と
うきてなのの仏仰をおく作ちまられ是仰房
と教文の仰そんあるり

上品

花　時々
月　雪
ハ有無ノ境ヲ超タリト知ルヘシ然ハ六月雪花時鳥等ま
ノ無念相ヨリテ入リテ仏菩薩ハ光花鳥ノ園林ニ
遊ヒ声聞縁覚ハ花菓ノ観念ヲコラス此故ニ
仏家ノ法ニ任セテ極楽ノ上ロ品ハ置タト仰諸ノ衆
三ヒ食ノ沿椀ト名ケテ喰ス飲ス食リクラトテ
中品

比丘　比丘尼
優婆塞　優婆夷
釈尊世ニ出現ノ時ハ一家一尺モ残ラス着テ第仏ノ
光ニ輝ヤヲカヽヤカシ手作ノ物凡物茄子モ今ノ仏
ニト奉リタルハ世界ノ人心ノ中今ト云ヒ余時ニ比丘

比丘尼優婆塞優婆夷ハ来観来礼敷ニ居ヨ
テ品弱ノ白和ニ用ヲ悦ハシノ焼豆腐ノ汲
ヲコホシテ勧ムル功徳ハ甚ニ成仏ト参見ヒレ
教迦仏ハ有柄ノ追善ト読キ玉ハ達ニハ向ニ懇切
徳トモコヒサレシヤ俳諧寄ニ此筆ノ献立ヲ俳談料理
ト名ヲツケテ如何ニモ中介ノ振舞ヒル〳〵シ

下品　團子
　　蓮飯
　　新茶
　　餅振

釈迦十王ノ勧メモ浪ハフヒ為ト八銭男ノ設ヒヤラ仏
ノ五千集巻トテモ乞道理ニハ過カラン去レハ極ヲク
ニ下喰ハスハ何ラ極手ニモン浪ヲテ極手ト霊テ抱手
ヒリ春ハ花ヨリモ団子ト読セラレ貧ハ時鳥ノ声
モ新茶ノ雷味覚コラ可笑レケレ然モ魂奪ニ心安キ
仏達ヒレハ三月ハ浪ヲタリ歌ヲタリニテ霊ヒ
親ハスカレ珠ニ蓮殿ハ其ノ匂ラモメテ来ク仏ハ必者モ
乃ハス手(テノ条)スルモ亦極手ヒリ餅搗ノ比ハ亡人(すき)ノ来ル夜
トテ魂奪ルワサモ都ニハヒキヲ越後ノ方ニ稲ノ見
トテ之ノ月ノ舟キ(つき)ヒテ垂ヲ夫ノ為ア〳〵ラレヒハ思ラ下レ
赤鬼モ心ヤハラキ(ゆるき)ヒテ垂ヲ夫ノ為ア〳〵ラレヒハ思ラ下レ
悠ルラ仏家ノ生ニ仕セテ極手ノ下品ニハ置タレト俳諧ノ

京ニハ上品ノ馳走ト云イ手鏡久北四題ノ中ニ酒ト
黄染(ニシメ)モアラハト思フハ秋夏ノ御房ノ解ト云ヒカ
狂云北堂伸ハ全ク靈誕ナカラ十二題ノ註解ハ解体トヲ
(キナリ)ト云レハレ九品ノ次ヲヲフ方ヲ三重ハ上品ト下品ト
云イヲ中品ハ有無ノニヨリ三昭セルヤハ朱楓集ノ教
ヲ経文ノ詞勢ニ知者セタルヤハ下品ノ四題ヲハ逐一ニ
注釈シテ一々ニ楽ハヨヲヲ高セタルヤハ蔵書ノ手挙
ニ徒然草ノ詞ヲ借ッテ越後ノ方ト取ナシタルヤ北ヤ結語
ノ狂言ナル時ヒ々御諸ノ筆法ヨリ出テ虚実ハ水上ノ
胡盧ヲ轉スルニ似テン但シ是仏房ハ先師ノ角号ナリ

むかし許由と云世捨人ありけり人ハ竟なりとふ
言を神妙なりとて堯帝の招聘ありけれ共耳を洗ふ
とつふやいてあるき人ありて和漢の才士逸民の
逃をきいてゐへうそ箱もちをあの
巻用まで及ぶそとおもはれて竟伝の酒色の間に
死て跡よ天下とさそ
ある酔森の松と

朱老坊

むしろ敵心の凍板と猿と倒心あるて幸ある彼ら
楚好物ともろ一彼ら三病根と論して猿書と異もと
いもり異書の見服のようもろ凡人ろ五性あり猿
ろ心臓のたるれい同れのいもろ一く生定の性あるも
とりて延とりて彼ら生ろ一彼ろもれ
三節をもろ病ろもり人ろ一彼をもろ一彼ろ秘へ物に
の醫通ろもろまれんもの一彼をもろ一彼ろ秘へ物に
滅して本性究論ろやもろいてくとが一こ事
ばい彼ろ病のおろ時あるもろ一彼ろ三事かいて
病とかふぶいろに某いたの書とかふて含らろも

矣へたの病とやして言ひあるは栗の種とおりて
ちゐくと彼ら生らと秘ろ一彼ろ三事かいて
ろあるるたの病のろ生ろ一彼ろ三事かいて
のいろと私ろ一彼ろ三事四のよれ一彼ろ三事かいて
自在ろ生ろ一彼ろ三事ん掌ん握(にぎる)よ一彼ろ三事かいて
ろ一彼ろ三事ともれんやもろ一彼ろ三事かいて
ろ十二種の佰仁一彼ろ三事かいて
の氣と養ろの天食とまれの一彼ろ三事かいて
の洞ろ猿の室まるろ一彼ろ三事かいて
沐秘るろ一彼ろ三事かいて世の人北生と養ろもろ一彼ろ三事かいて

の大概よろしからんやと
いふ説の多かりしを
こゝの世もよく教のまゝに
ふんぞりかへると儒仏の
ちがひもなくあらん

狂云此解ハ全ク荘子ニシテ荘子ヨリモ可笑キ処アリ
又ルハ之世相ノ主ヲウレキ長者狂ノ如ク細ウレキ道訓ニハ
金銀ノ無用ヲ明シ猿書ハ喜怒ノ二字ヲ解ス或ハ
何ド所ヲ生ヲ居ル人ト云ヘリ或ハ急度(キワトベカ)馬鹿ニ自注ヲ乞

或ハ猿ノ室ヲ守ヲ総ヲ
脅諧志ト云イ通天刑ヲモ希賢解ヲモ皆ヘ
ルテ古語ヲ引ケリ況ヤ聖人君ヨヲ嘲ケリテ雅人ノニヲヲ
取容セル推ハ通ヲ明ヲリト我ガ子訓ヲ加ヘルモ酔癡
ニ屋児ノ對ハ訂篇ノ伸ノ風流ヲカラ鬼神ニ君王ハ俳諧ノ
常語ニシテ叙述ヨリ過當ヲリ然ルヲ解者
ニ伯置ヲ歩ノ老ニ喩ヘタルヌ業ノ上ノ奇絶ニノ栗棘
ノ作意ハ神変ヲヘシ但シ此篇ハ荘ヲカ養生生ラモトキ
テ我朝ノ文章ノ鼓舞ラヲセル和漢ノ通用ヲ見ル処
ヘシ故ニ荘ヨカ弥ヲラルテ人間第一ノ結語ヲヲセル此等

二先師ノ文筆ヲ校レテ此筆ニ先師ノ眞蹟ヲ知ル（し但し
此筆ノ字格ヨリ垂露ノ誤ルヲ亦有ル（し

地黄前胡解

桐庵南

いつ一の捜神書れ地黄ヲ草ノ部ニ載セ其ノ形ヲ畫ヲ加ヘ
の如ク分ケ生ト熟トノ性ヲ論ジ一切衆生ノ病ヲ療ス
あきれ好心をたくらみ
みて百錬ノ鍛の話をあるように
経方あり
れる量
瑁瑇の

の人ゝそゝひて歌かゝるのあらひこいた鉄貫
北きもるの一しゐかゆるもだちり富まれおうちたに
今そゝ〳〵負賜とうもゝ〳〵らく栄厚のたらひと
そゝにまそたゝく歌のなゝ
ま〳〵我万捕のまそれをもて竹の皮一枚ゝたゝ
八珠の膳をそゝれてなゝ
のなおゝ布袋のおやちゝこゝれてかゝおゝ
北まゝ詞とゝゝんまくゝ花菓まゝゝゝ
るゝて教をゝゝそむゝゝゝ大ゝまの児外
も仰きの菜の掛をゝそとゝゝまくゝふゝん

在北解ハ和漢ノ諸物ヲ引テ儒仏ノ教ヲ励ニ喩タル珠ヲ
解休ト云ヒシ若ハ混沌ノ如ニ祝客シテ戯多ノ故ヲ又右語ヲ
用イメル意又ハ且ハ筆ニ且ノ白又アリヤト驚ク之ヒシ栄辱ノ
在對ヨリ或ハ花紅塵業ノ風流ナル或ハ鬼神ニ掛ケヲ對シテ
結語ハ世情ノ偏和ヲ云ヘル誠ニ能諧ノ筆格ヲ傳ヘ誠ニ文佳
ノ虚實ヲ知リテ筆ヲ下セリト云ヒシ但シ左角ハ
相撲ヲ中ニシテ依角アリト云ヒシ北依角ハ東ノ人ナリトソ

傳類

正直ニ房傳

西ノ上人

そゝ国とゝゝやん中比そゝの国ゝあゝーの傳ゝ里とゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

依テ席ヲ下リ曲ヲ九ナヤラ往生スト小誠ニ村法家ノ祖師トモ仰ク
ヘク誠ニ他諸ノ事格トモ讃スヘシまして西行上人ハ和哥ニ真俗ノ風情ヲ尽シ又三昧宿ノ自在ヲ
得テ宏モ対営ノ黒ノ衲スキト亦人ニ比儔一人ナランカ

藤六坊傳

(イハカ)
こゝに因幡ノ宮伝ノ坊ニ一人の聖ありてそのふるまひ尋常ならず
ふるまひもとゝのはず(ノクルキ)偬偬(ノクルキ)としてあるかなきかのごとくにて
常に衣食のたぐひもなくてたゞ一鉢のみ持ちて諸の僧あれ
ばそれに行ちて一鉢のうちなる粮ふし食のみにて一生を過
ぬ西行の人用をこゝろえて測りがたき事ありとて
あるかの彼ノ宿と(ヲヲタイ)礫貝の玉仙と吹るゝ
近里遠郷へ行てなどや貴ニ招かれてゆきて一夜
ト云のまもなく帰りきたりぬ一夜
ふもやありけんをみの衲のすそをかきあげてものゝ
ほとりあゆみ行ちたるとぞ
そのかゝる乞丐あるく婚望ひとしてみな

ゝえ中のかれ一ほんある人けだかうして世のそしりをもはゞからずいひちらしてゐもあるべきことゝもなきものゝ名をかりてかゝれたるものゝ多かるべし

扨云北傳ノ法師八九骨ヲ離レテ世ノ眼カニ及サラン去レ共唐傳燈録ニモ宋ノ隠遠傳ニモ北如キ狂僧アリテ或ハ人ト和詩ヲ一両ト云ヒひらかなをしらずしてかくんをしらるゝなどいふ人ト賢人ト狂人トモ傳ヲ寄ル所ニ依ルヘキナリ誠ニ孔子筆法ナルヲヤ或ハ開明ト西行ト春秋ハ百世ニ恐ルヘシ

和漢ノ凡人ヲ取合セ或ハ一休ト增賀ト八会ニ狂僧ノ標

ナラン然ルヲ教誨ノ二ヲヨニ依ラハ左モ市中ノ大陰氏狂

一ニ但シ作者ハ各(おのおの)ヒトシテ美濃ノ山縣(やまがた)ノ産ナリ

狂僧傳

東発坊

白和尚ヲ生ル處ヲ聞ニ或ハ孤ノ子ニ或ハ孤ノ子ニ或ハ孤ノ子ニ

ありつゝ世ヲ或ハ孤ノ子ニ

物くれおとろくし秋の末より年のわし六

そくりある童部の名れ鍾馗(しやうき)をおひわき腰

のほりれ来かゝれ何んをくてあそひ居りうち

の和尚もあやうく

訳人に託する和の字人に
よるおもむきそ
え利の歌多く人
きしかゆえとそ
中き人八く吹れそ
られて傾城買そ
て人向宮上のあれ
ず十録の述す
宮古のを訳
世そそ過不足

これ
ふそ
の
佛語ハ
く
て
い
て

うて云ふ竜蓋内の一脈を汲むに心ともて
蓋内より云ふ世の正統あるに非ず私の
仰法の式ばかりもそうとも云ふ一をそうれの
不れるをんとや況や他のつまをもうてれふた
七化のおの来とおもうとも
うと云ふ黄山の伝れありてと天下の人ことごとく
(くへ伝を)新字のかたまりて師ふれた筆来を失ひを新八伝達。
而用と云ふ伝んやは此伝の一ふを以て直旨
の伝とするつまるとき新文におろそかにするもの
任云北傳八班固カ論賛ニモ似タラン去レハ北傳ニ名利

ト妨ケヲカケテ狂ノ人ニ狂ノ人ハ儒仏ニモ統サル所
ニシテ誠ニ新家ノ方言ト云ヘシ或ハ人向ノ哀毛ヲ對ス
ル實ナレハ忽ニ實ヲ云ヘル向對ス對ス
ノ自在ヲ私スヘシ但シ只ハニ之源(サトシヤ)ト本ヨリ二ニムメノ通前ニ
テ頓(ソン)ト頓(ソン)トノ和語ヲ知ルヘシ或ハ文字ノ法捨ヲ免レ
御諚ノ様要ヲ免ガルハ古今ニ例諚ノ要ニ言ニテ前ニモ要
化ノ人ヲ待ストニハ前尾ノ文法ヲ見ルヘキリ端ヲシテ摺畝
ノ玄理ヲ云ルニ云ニ師固ノ渡ヲ授ケシ或ハ釈門ニ何雅ハ
計傳ノ中ノ奇節ニシテ伯狂ノ二子モ孤ノ一子モ急ニ何モヲ
稀ヲテ看破スヘシ但シ黄山ハ先師ノ別荘ニメ伯狂カ文所

記類

拔記

敷地の拔て庭をみて庭の内とおもふ窓よりもれし人
ふしぎの方とおもふ窓よりもれし人
庭と思ふれて門ある性のなるのとおもふ人
も是とおもふ表とおもふ
形とおもふ表とおもふ
とおもふ山国の客人
ある所ある山国の客人
二門の拔とおもふ

来のある山国拔あるおもふ
ひとり清き方石
ふしぎの方とおもふ
いひくと脱て庸の
ふ侍ふぬを
あらまくて
かりもれいふひそ
国拔をふ
拔書ふそ
耳とふ

幸を中ゝと物ごとに石を頭枕とれよさむしろ旅
うくとやふ行ふれあよくとしいうしや
或は空うのなまりてい二花とあやしくて桜の陰
やもうむといなふにい記とかそれの人こうつ
行云い記ハ世こ傳写シテ正写馬の誤モ有ル(キカ去レト
北老人ハ俳諧ノ中興ニシテ芳野山ニ花ヲ詠レ備川
ニ鳥ヲ吟ス當時正風ノ祖ト云(シ然ルニ廿ノ名高
セテ方圓ノ枝ヲ形容セル老ノ乗覚ノ筆右カラ往
ノツフリノ結語ニ到リテ虚實自在ト称ス(シ但此老
ハ晩年ニ俳諧ヲ知レルカ向己ノ短冊ラハ焼捨ケルトソ

一堂あり句弥とよてろとそこいやこ方もつ好ちまあれ
うしたなその往のとのつゝ活働ありて世とふれて向に
眠てくんと雲いむしてとろくのやいてもれのあるふ薬く
よ竹とさうのまて本とやしてお深よ礼ろの
おちふ往ふれねよ前棘のちろれくうかそ
実に指えんれ恵とれそ但十ハ枚のれひは七一よ
但ろのふことろろれ純人の助力とゆを向名の
ふ引とたいやとこ足とく附ろこ寸に

表紙

吁の角虫るゝ法んとうに就ても笑ふべ
む亦の角在るんとひうに就ても笑ふべ
と感をるゝ今ら記之水仙の香まら記之水仙の香まら記
法師ともゝ言にまれるやし言中の幸ひと記
怛しなをゝもゝ
狂公北山記八殊三蘆屋座ヌラ得ず雖三和ラノ連徴り誠三御詰
ノ戯詩アり去レハ白鶏ノ二字ラ以テ一張ノ紙帳ヲ形容セ
始ハ楠先生ノこまニホノメヤシ終ハ紙帳ノ二字三題ハ此ノ
蕉窓ノ格トヤ云ハ一ノ篇ノ文章ニ而所ニ四ま花鳥
ラ云ハルノ前ハ閑戸ノ二字ラ陳スルヨリ紙帳ニ四まノ風流ラ

壽ラ呪や算ノ長ト算ラ置ルト文ニ文中ノ文アリト云レ
後ハ庭ノ二字より梅樹女ノ四まラ云ハル總テ人堂中ト堂外ト
ニ而採ノ花鳥ラ眉分ケテ前ニ四まノ情ラ云イ後ニ四まノ
次ラ云ハルニ而処ノ用ラ見セより殊ニ四まノ結詰トメ春ラ
迎ルト眉捨テ四まノ次第ノ行ワニヨリル但シ文章ノ一体ヨリ
或ハ鄭玄カ待心トハ云ヒ牡丹ノ通途ニ待ノ一字ラ位ヲテ圍扇ノ
風ラ眉ナセルニより和漢ニ右詩ラ摘ニ右ニラ拝ンテ此集見
ノ故ヨラ用イタル讀人ハ容易ニ看過スヘカラス然ニハ此記ノ
結文ハ芸亭尭カ水仙ノ二字ラ招キテ美色ノ戯ニラ合セ
ハラ明ニ圖ニラ比フヘキトモ旦ハレヤ俤ノ立添ニテトモ愛別情

ラ舎メタル作右ニ節ノ意ヲ思ハセ人ヲシヤ
レ故ニ其ハ後トニヨリ桓王ノ避ヒニ美術住者ヲ設ケ水仙
ニ恩能ヲ待ツ処ニ思イモ寄ラヌ記雅
陳ヲ顧シ高居賦ノ意ニ效フ実ヲ俳諧ノ筆格ト
シテ詩章ノ文法ヲ交セリト称スヘシ但シ仏者ハ捨ノ伊州ニ
達シテ木林氏ノ隠者ヨリ前ノ在国ヲ伊州ノ別号トフ

東花坊

柳子庵記

柳子庵のそなはりつれの意ありていつことの事とは
しらすとそ次ニいふ在国ヲ世ヲ指ス一ニ何有の

郷のなりとやあらん或ハ梅檀の林ニかくれて労徳の住
をねるのむろなるなとて或ハ杜舟の花よあみし河儀
のうちとかはらんともあるへしなをとゝまるのそ
風のおれふくとゝまるのそなかんむそいもの国ニなりて
かのうら居のおのおのおれ心国ニはらの行るをみれハ
五条妻ニ乗きひてそ昔の踪とそうれ給ふ
やそそれ花ちるの陰とそのむ郎ハ十二の事秋
又それをの柳子庵とゝ
ニりかくりてんよ作ひ〳〵くもおちるをゝ
流もそ遠く塵の下ニらひ

あつて四もの蓮花をそなへまれに四五輪の花をつくることく一二庵さうに一本花あるくらゐなり此山武蔵
也二日たの記文秩父をてたことと柏手して祈るといふもの庵にたの長四のこるんにうまてあてて
うやり花と枝をとりてあるこれをめぐりて花をめでうたふ庵ありと言ふ庵ありと言ふ庵ありと言ふ
ふまてあれ天下に称せる庵ありと言ふ庵ありと言ふ庵ありと言ふ庵ありと言ふ庵ありと言ふ庵ありと言ふ

右云比記二改変古語ヲ用ル変態ヲハ九ツ五負アリヲ
種々ノ文格ハ有ナカラ先ハ頓挫ノ法ト云ヘシなり一首ノ
ノ句對字對ハ例ニ先師ノ筆格ナレト竹ニ雀ノ画文ニ

至ラヲ見ル有ハ変ニ絶倒スヘレ抱ヘレハ仏ノ大宅ヲ云イナカラ
心トムナトハ正行ノ詞ニ寄セテ具次ノ二句ヲ云イナセル是双関ノ
伝トヒルヘシ或ハ梅檀ノ種ノ師子ニ禅録ヲ用イ或ハ無数ノ蓮
花ニ仏種ヲ忘ヒル但シ一東花ハ東坡カ詞ヲリ天地一東坡
ノ郷言ナラン去レハ此笠園ノ脊筋ハ中向ニ右郷ノ師子庵ヲ
記シテ良玉ノ二情ヲ尽ナセル此筆ヲ垂賞ノ文鑑ト
ミテ誠ニテ視ヲ簡ニ飽サラン

往来松ノ記

江村北海

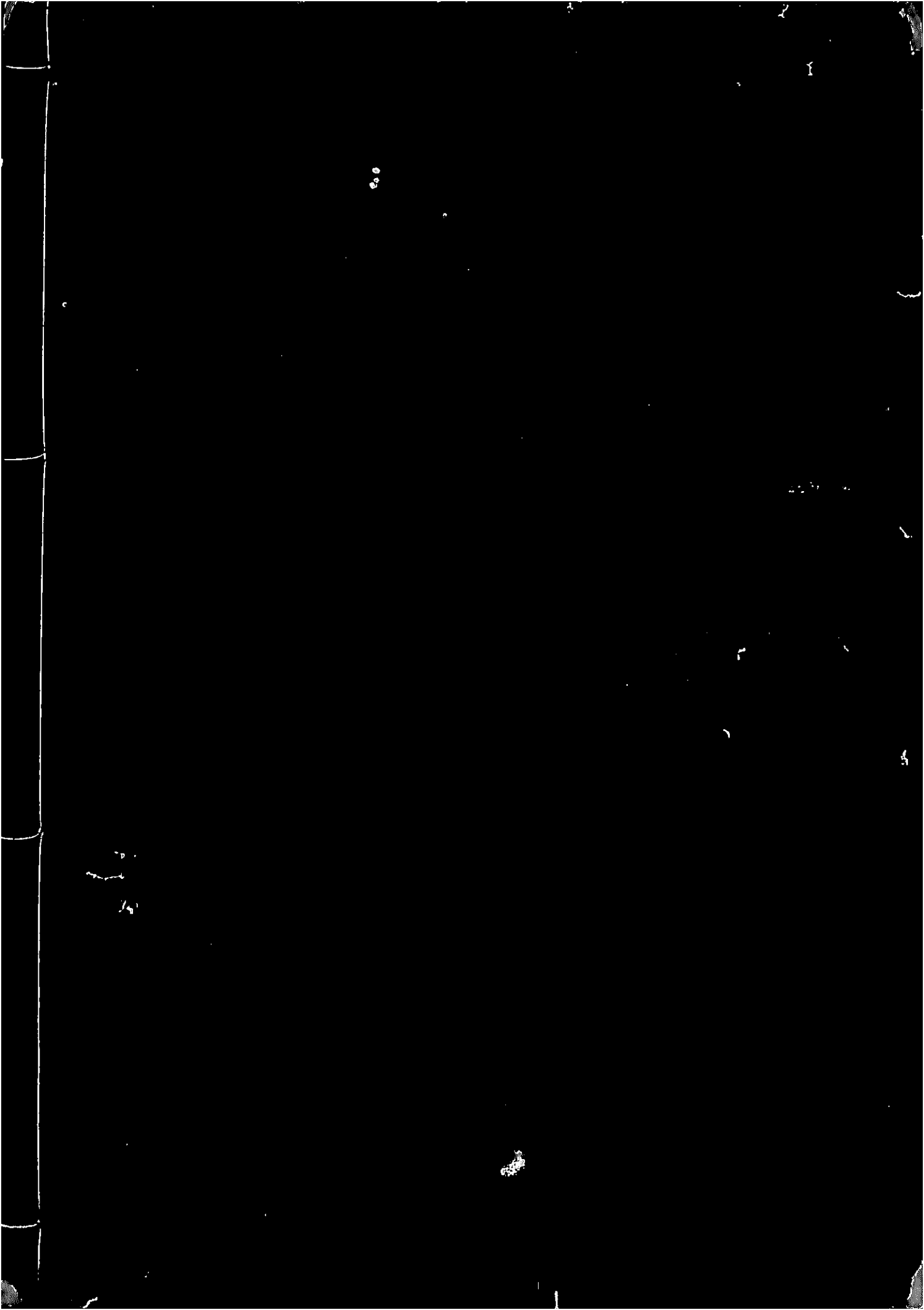
ミヤコ園加納の陣の西に一本の松ありてみの里ぶた

古戦場ニ立テ伊吹颪ニ送ラル秋風ヲ聞ク
ノ櫻丈ノ桃李ノ顔ヨリ紅ナリ
ノ蹊ニ云イ寄セタル定家卿ノ恋
実ノ初雪ニ給ヘタル珠ニ顧況カ詩ヨリ得来ノ詠ノ
情ヲ駐メタル總テハ和漢ノ故実右語ヲ用ルニ應用
自在ノ文筆ト称スヘシ然ルヲ結語ハ我国ノ名松ヲ借テ當世
ノ松ヲ答ヘセル比ノ!

六花亭記

西花坊

計幸ナル名ト云ヒツヘキヲ然ニ雪ノ字ヲ
ヒテ何ノ幸ヲカ對シテ
おそれおろおろとうけたまはりぬ
とて和尚とあさむく仏法の御證
もて念仏とをふりの
ふりもて連句とそしり
ふりおてまく歌をれ
ふ集おて何ものも面
とまて三巻の趣とちら
ふけねはて何あるしも
なの名別ら西花坊
中く富ませうの也し

仍云此記ハ例ノ筆招ナリカラ並ニ許着ト雖モ云ヒ但シ
云ヒハ雲ノ異名ナリトヨリ云ヒ雲ノ二字ニ對シタル歟禅ハ其ニ喩ニテ連寺ヨリ他詣ヲ
爭フニ似タレト畢竟ハ雲ノ時雨ニ晴レリト称シテ賀意
ノ晴雪ハ文章ノ通寓ナリ但シ此ニハ云ヒハ汎ニ下降
ニ在リテ盤古ハ其一生ノ俳名ナリ

帝國大學 文學部 昭和9年 3.